

一 出版人から見た本田安次先生

中 藤 政 文

ほんとうに尊敬してやまない本田安次先生の学問の総仕上げのお手伝いをさせて戴き、幸せでこんな有難いこととはなかつたと、日々想われないことはありません。

それだけに、お約束の著作集別巻の刊行を成就できていないまま、此の原稿を書かせて戴いてしまうと、

「停滞させている仕事をするのが先でしょう！」

と云う先生のお叱りの声が聞こえて、躊躇していました。そのような時、弊社の近現代史関係の編集を担当している親しい友人に相談したところ、——活版印刷が消えていく一時代を書き遺すことにも充分価値があるのでは？と云われ、考え直しお引受けしました。

そうです、正に、その百年を超える歴史を有する日本の活版印刷技術が消えようとしている時に、必死で活版

印刷で活字を拾い（文選）、組んでもらい（植字）、校正を三校・四校と進め、校了となったものを清刷り（整版）してもらい、それをオフセット印刷したわけです。本巻一卷から二十巻までのすべてを此の工法で仕上げました。今春、明治聖徳記念学会様から、

『出版人から見た本田安次先生のお人柄・業績に関する随想』を、という機会をお与え下さいましたことに感謝して、此のエネルギーをもつて別巻の刊行に当たって行こう、と調子のいい弁解をさせて頂き、筆を執りました。纏まりませんが、沸き上がる先生への想いを綴らせて戴きます。

印刷所を指定される

先生のご著書出版の嚆矢は、昭和四十九年十二月刊行の『日本の祭と藝能』でした。その四ヶ月ほど前に、原稿を頂きに、弊社の押切弘番頭と早稲田大学の研究室をお訪ねしました。

先生は原稿を出版社へ渡される時、いつもそうでしたが、ご希望の組方見本すなわちコピーを切り貼りされたものを用意され、

この活字の大きさと、天地〇〇字詰め、行間のアキは此の通り（九ボ全角とか五号二分とか）、そして挿入写真の位置と希望の仕上り寸法

まで明示してあります。さらに、キャプション（写真説明）の入れ方もイメージされてあります。

と、それはそれは、出版社も印刷所も大助かりの超ウルトラ・スーパー完全原稿なのです。ですから、四、五百頁あっても入稿から三、四ヶ月で、刊行できるのです。その上、校正も厳密で、正確で、真に早いのです。

実はその時に、先生は、

「一つだけ、お願いがあります。」

と仰られ、伺うと、

「私の希望する印刷所を使って下さい。そこは、こ

れから案内しますが、早稲田大学（以下早大）印刷所です。」

ハイ、そう致しますと、返事をしましたが、出版界に身を置いて五十年を超えましたが、印刷所を指定される著者は後にも先にもいらつしやいませんでした。

そのあと、早大正門前、大隈講堂と早大通りを隔てた所にある小さいビルの二階の早大印刷所の事務室へ案内され、間瀬晴男所長を紹介されました。本田先生と意気投合されている印象を受けました。

実際に仕事現場・工場も見せて戴き、活気が漲っていました。文選・植字の職人さん達が忙しそうに動かれています、活版印刷の衰退が囁かれているのが嘘のような活況を呈していました。

しかし、実際にはその頃から早大印刷所の活版印刷の部門は、近い将来、廃止する方向で検討されていたようです。

事実、著作集進行中に、その整版、組版を外注するようになりました。

活版印刷熟練工・新井正様

実はその早大印刷所に、後年すなわち二十数年後、弊社の『本田安次著作集 日本伝統藝能』全廿巻の刊行

で、大変お世話になる活版印刷の熟練工・新井正様が居られたのです。

新井正様は、廃れつつある活版印刷を愛してやまない情熱家職人さんで、御歳も五十代、経験豊富、活版印刷をこよなく愛する本田安次先生との呼吸もぴったりでした。

何巻目の頃でしたか、この新井様が本田先生にお詫びしたいのでご一緒させて下さい、と仰るので、二人で先生宅へ伺うと、

「真に申訳ありません、先生お好みの六号活字を廃することに決まりました。ほんとうにすみません。」
「しょうがないですね、できる範囲で最善を尽くしましょう。」

と、先生は仰り、活版印刷の将来・行く末を熟知して居られたようでした。

早大印刷所の活版印刷廃止の第一歩でした。新井様は、活版印刷の印刷屋さんへ移りたい、と漏らしたことがあり、辛い目に遭われているのだなあ、と感じました。

独立採算制の早大印刷所が、企業である以上、効率優先で進むのは当然です。組みでも、刷りでも、仕事の早さ安さは比べものならず、その仕上がりが、年々差が無くならず、昨今ではオフセットの方が仕上がりがきれい

になりました。

この新井正様を、早大印刷所（完結時には早大事業部に社名変更）は、弊社の『本田安次著作集 日本の傳統藝能』全廿巻の主任・責任者として起用して下さいました。どんなに助かったか、筆舌に尽くし難いものがあります。新井正様は、本田先生が好まれる活字の大きさ、行間^{マタ}、そして割註の体裁とその殆どを熟知して居られましたので、仕事がとても順調に運びました。

さらに有難いことに、弊社の編集に参入して下さいましたのが、木耳社時代に本田先生の『日本の民俗芸能』五巻本の最後の巻『離島・雑纂』の編集、校正に携った渡辺志郎氏でした。渡辺氏は福島県のご出身で、中学時代は毎日本田先生のご実家「本田活版」の前を通って通学されていた、とのこと。ご縁を感じました。

この人の校正も細密でとても助かりました。また、装幀家の吉野史門氏にも加わって頂き、著者本田先生のご意向に添った仕上り、造本にすることができました。

そして、とても心強く助かりましたのは、先生のご長女・高橋美代様が、この仕事のほぼ半ば（平成八年）から、お勤めを停年で退かれて先生の助手をして下さいました。最強の助っ人でした。

前置きが長くなってしまい、順序がおかしいですが、著作集の具体的な話に入らせて戴きます。

企画発表

とは言っても、昨今の大手出版社がやるような大袈裟なものではなく、本田先生の著作集の練りに練った構想を全十六頁に収めた「総目録」（冊子）を作り、取次店（本の問屋さん）に配りました。

今は無くなってしまいましたが神田小川町の取次店鈴木書店の仕入部の有名な井狩春男氏（現エッセイスト・評論家）が真っ先に、手書きの「日刊まるすニュース」で大きく取り上げてくれました。

驚いたことに、電話で一人、さらに弊社まで尋ねてみえて、抗議をされる方が一人ありました。それは、

おたくは、本田さんの著作集全廿巻を刊行するということだが、ほんとうに最後まで出してくれるんでしょうね？、途中で止めてしまうことは無いんでしょうね！

と云うことでした。今思うと、抗議を受けるのは当たり前と判りますが、先生の御高齡を識る方には信じ難い企画発表だったのでしよう。

第一回配本が著者の米寿（八十八歳）記念出版で、そ

れから、さらに毎巻五百から千頁（平均で約七百五十頁）近い新組みの著書をあと十九巻も出すなんていうエネルギーは、あの小柄なお体の先生の何処にあるのだろうか、と考えられて当然です。私も返答につまり、

「本田先生の八十八歳は普通の方の八十八歳とは違いますので、全廿巻完結まで長生きして下さるものと信じています。小社も頑張ります。」

としか答えられませんでした。

それは、また暗に、錦正社が潰れてしまうことは無いんだらうね？、と云うことでもあったと気づかされました。

此の発表以来、神田村（出版業界関係者の用語で、書店街として有名な神保町を東西に横切る靖国通りの南側、神保町から神田錦町にかけて多く集まる書籍販売会社（取次）のある一角を比喩的に「村」とみなして呼んだものである……ウィキペディアより）では、「錦正社、危ないのでは？潰れるかもしれない。」と噂されていたと漏れ聞いて居ります。

こういう風評は、ますますやる気を起こしてくれませう逆にしても著作集を完結させ、錦正社を潰さないぞ！と強く意識するようになりました。

そこで前後しますが、企画発表の前段階に少々触れさせて戴きます。

昭和十三年一月、弊社は神田錦町一丁目六番地に創業しました。空襲でその総ては灰燼に帰し、戦後のスタートは神田淡路町、本の取次業でした。戦後の出版の再開は、昭和二十八年。その間、先代（父で創業者・中藤正三）はGHQの追放も受けました。そして、戦後の出版が軌道に乗ってきた矢先、昭和四十一年二月全日空機羽田沖事故で遭難死、私はその時十九歳、押切弘番頭と後を継ぎました。漸くその出版が面白くなってきた時、平成二年、手狭になってきた神田錦町一丁目四番地の店舗併用住宅を離れる決意をしました。

そして、少々の資金の目処もつきましたので、二十年来の私の夢『本田安次著作集』の刊行をお願いするべく、沼袋のお宅へ、先生をお尋ね致しました。

先生は大層お喜びになられ、すぐ書斎から持って来られたのがその詳細な内容を記した原稿でした。

この収録予定書目一覧を先生は前々から作られてあったようで、大凡の頁数まで計算してありました。

八年ほど掛かって、完成・完結できた全廿巻は、ほんのこの構想通りでした。

先生と弊社の目標が一致して、すぐ『本田安次著作集』日本の伝統『能』の目録を作りました。勿論、早大印刷所で刷ってもらいました。

この仕事が始まる時、先生から重要で有難いことを二つ言われました。

その一つは、最低・最少の人員で錦正社を切り盛りしているのを見て居られた先生は、

「私は毎晩十一時頃まで仕事をしていますので、私の処へ校正を届けて下さるのは、夜八時でも九時でも構いません。」

このお言葉に甘えさせて頂き、とても助かりました。

丁度この時、弊社は、倉庫を浅草から朝霞へ、事務所を神田錦町から早稲田鶴巻町へ、住まいを錦町から新宿上落合へ、と三つの引越を抱えて居り、

「このところは、三日間で八時間しか寝て居ません。」

と申し上げましたら、先生は、

「人間は氣力が充実していたら大丈夫ですよ」

と云われ得心、大いに励まされた気になりました。

神田から『著作集』を残業して進行して下さっている早大印刷所の新井正様を訪ね、組み上がった校正刷を受け取り、沼袋の先生宅へ。

これが丁度一本のラインになって居り、効率も良かったわけです。新井様にはご苦勞とご迷惑をお掛け致しましたが。

御高齢（当時八十七歳）の先生宅を夜分になって毎晩のようにお邪魔する非礼にも拘わらず、奥様はいつも歓待して下さいました。お庭のホトトギス・花苺ほか株分けして頂き、今では、その季節に美事な花が、わが家の庭でいっぱい咲いて楽しませてくれています。その度に奥様に優しくして戴いたことを思い出し、私にとつて奥様（まさ様平成十年十一月十日御逝去）の忍び草（墓草）と なっています。

さきほどのこの仕事をスタートさせる時、先生から言われた重要で有難いことの二つ目は、

「この仕事を進めて行く上で、お互いに無理はしないようにしましょう。くれぐれも。」

と何回も念を押されました。先生の暖かいお気持ちを頂戴したのに、私は後年、大失態を演じてしまいました。実は血圧の高めな自分に、寝不足は禁物だったのです。正確には平成六年三月、丁度第四回配本、第四卷『神楽Ⅳ』の刊行目前の時でした。

すなわち、それは別の大型企画が並行進行して、その納期を間に合わせる為にどうしても、最後のところで、二日続けて印刷会社へ出向いて徹夜の出張校正をしなければならぬところに追い込まれてしまったのです。編集者と二人で池袋の印刷会社へ十九時頃着いて徹夜の最

終校正を行い、さらに翌日も二晩続けてやり、三日目の早朝、目眩と吐き気がして自宅で倒れました。

すぐ救急車で東京女子医大病院（新宿区河田町）へ運ばれ、翌日開頭手術を受け、三週間入院してしまいました。この時、本田先生が二回もわが病室をお見舞下さいました。ボケーとしていても、御尊顔を拝すると、とても寝て居られず、緊張・恐縮したのを思い出します。その病名は蜘蛛膜下出血、開頭してクリッピング手術を受けたと云うことを退院後に知らされました。

本田先生の態々のお見舞が真に申訳なく有難く嬉しかったことと、①家で倒れた事、②救急車が東京女子医大病院へ運んで下さった事、③その出血した箇所が手術可能な場所だった事等の幸運が重なり、入院中もその後もしハビリを受けること無く退院でき、今では、好きな吟詠、吟行、草野球、テニスを楽しんでいます。

先生とのお約束『くれぐれも無理をしないようにしましょう。』は、とても重い一言でした。お詫びの申上げようも無く、この奇跡的快癒は、

「仕事をしっかり仕上げなさい。」

との天の声と心して、編集者、同業者、取引関係者、そして家族に支えられて社会復帰することができました。小生、四十八歳と六ヶ月の時でした。

そして、また先生と一歩／＼著作集の完結に向けて歩み始めました。

正確で丁寧な校正

先生の手稿が、最高の完全原稿であることは先に触れましたが、その校正も極めて緻密で正確な上に、頗る早いのです。

各巻を平均すると約七百五十頁の本文と、文字数も極めて多いのですが、三校、四校と難なく熟^{こな}され、更に各巻終盤の校正では、白焼の最終確認もして下さり、その上、普通の著者は見ることも無い台割表までチェックして下さいました。

この台割表とは、印刷屋さんと印刷寸前にする確認作業ですが、著作集の場合、通常の前付け（まえがきや目次などの本文の前に来るもの）○頁、一折目（書籍は大きな紙の裏表に16頁分を割り当てて印刷していきます）○～○頁というように単純では無く、別頁扱いの挿入写真頁（用紙もクリーム帳簿用紙を使用）を最も相応しい処に入っているか、の確認、これを慎重に調べまさんと、印刷、製本の段階でトラブルになってしまいます。これは何としても防がねばなりません。

ここまでしっかり確認作業を経て漸く下版（印刷をす

る段階）となります。

各巻の終盤の校正は、一纏めにしてお届けすることが間々ありましたが、大抵の場合、翌早朝、私の家にお電話があり、

「校正を見終わりましたので取りに来て下さい。」

と云われ、直ぐ参上するのですが、先生は私に「無理はしないようにしましょう」と仰ったのですが？ 果たして先生はきちんとお休みになったのでしょうか？ と疑問に思うことは屢^{しばしば}でした。

しかも先生の校正は必ず最低でも二回は目を通されるとのことでした。誤植・校正ミスは一巻あたり、一、二箇処でした。弊社の方で誤植や先生の見落しを発見できた時は、それはそれは、とても喜んで下さいました。

先生が誤植のまゝ、と云うことを許せない厳しさについては次の『伊勢神樂歌考 増補改訂版』の項を参照して下さい。

著作集の校正は、再録原稿が多かったのでその分早かった、と思われれます。

『伊勢神樂歌考 増補改訂版』の一丁貼り

著作集刊行の五年前、昭和六十三年十月に『伊勢神樂歌考』の初版第一刷を刊行しました。それから九ヶ月後

の平成元年七月にその増補改訂版（以下「増訂版」）を刊行しました。

すなわち、わずか九ヶ月で、初版の増訂版としました。それは一丁貼という技で、誤植部分の頁を丁寧な、のど（書籍の本を綴じる側）の部分一ミリ程を残して切り捨てます。そして、初刷と同じ紙に修正して刷り直した頁（天地・左右ともや、小さ目に断裁したもの）を先ほどの残したのど一ミリの処に接着剤をつけて貼り込むわけです。こんな細かな手作業は通常の騒々しい工場では難しいので、退職した製本職人の自宅へ運び込んでやってもらいました。

本田先生は誤植のまゝ、普及され続けることを看過できなかつたのでしょう。ある時（初版刊行後八ヶ月位を経た時）、先生からお電話で、「お願いがありますので来て下さい。」と、すぐ何うと、

「眞に相済まないが、『伊勢神樂歌考』のおたくの在庫分すべてを造り直して欲しいのです。」

先生の作られてあつた訂正原本を拝見すると、結構大変そうな仕事でした。

まず函はすべて造り直し、「増訂版」の三文字を背とヒラ（表）に入れる。表紙も一丁貼の済んだ本を箱押し

屋さんへ持ち込んで、そのヒラに「増訂版」と金箔で入れる。

口絵も初刷の口絵の印刷の仕上がりが少々甘かつたので、刷り直し一丁貼り、本文の修正箇所は全部で二十箇所ほどあり、仕上っている本をそれほど切り貼り修正して、製本上の強度は大丈夫だろうか？と疑問に思った私は社に戻るや否や、神田鎌倉町の製本工場へ駆け込み、この難作業を引き受けてもらえるかどうか？またその強度は保てるかどうか？尋ねました。

「やりましょう。」
の二つ返事で引き受けて下さいました。しかし、これはなか／＼高等技術を要します。よく何うと、その工場ではできないので、先ほど説明した退職製本熟練工の自宅へ運び込んで手作業で仕上げてもらう、とのことでした。漸く仕上つた増訂版を先生へお届け致しました処、先生は、

「いやー、有難う、有難う、これでより正確な資料（史）料となりました。素人の人には修正されているのは判りませんね。良かった、良かった、ありがとう。」

と、何度もお礼を云われ恐縮すると同時に、面倒な作業を素早く仕上げてくれた製本屋さん感謝の気持ちで

いっぱいでした。

その増訂版序で、先生は、

割合早く増補改訂版を発行し得る機会に恵まれたことを感謝する。―中略―私自身、初版になお愛著を感じてゐるが、初版をお求めいただいた方にはお詫びを申し上げるほかはない。

承るに、最近、『神道大系』文學篇「神樂歌」の中に「伊勢神樂歌」も白田甚五郎氏の校註によつて收められる由、しばらく「伊勢神樂歌」が忘れられたやうになつてゐた折節まことに喜ばしい。それにつけても、今も全国的におびただしく傳承されてゐる神哥の整理も望ましい。

なほ不備の點が多いと思ふが、この上とも、博雅の御示教、御鞭撻を冀つてやまない次第である。

平成元年六月

著者識

と述べられてゐる。

先生の学問・學術書へのご姿勢と厳しさを痛感した有難い出版でした。

実はこの増訂版の細かい技を見抜かれて、この本の書評を学会誌（『民俗芸能研究』第11号）（平成二年五月）に発表された先生が居られました。ほんとうに驚きました。

「ほとんど判りませんね」と先生と喜び合ったのも束の間、初版本とその修正部分を詳しく検証されているではありませんか。それを書かれたのは故岩田勝先生でした。さきほどの増訂版序に本田先生が書かれています。白田甚五郎先生は、第七卷「神樂VII『伊勢神樂之研究』の付録（月報）に、「伊勢神樂歌小見」と題する玉稿をお寄せ下さっています。

その冒頭で毎日新聞夕刊（平成七年三月六日付）のこの人」という欄の本田先生の記事を紹介され、

―そこにきよく高くてげに翁さびたといふより、神さびた風貌をそなへられた本田安次先生が云々、と書かれてありますのがとても印象に残りました。実は私も本田先生を畏れ多いのですが神様のような方と感じて居りました。私ばかりではありません。先生のお弟子さんのお一人も「私もそう思います」と仰つて居られました。

此の口絵は最高の和紙に刷つて下さい

第七卷・神樂VII『伊勢神樂之研究』の仕上が迫り、その口絵の編集にとりかかった時、先生は、

「この彩色画は極めて稀少なので、是非最上等の手漉和紙に印刷して下さい。」

とのことでしたので、和紙の見本帖をお届けして先生に選んで戴きました。

そして、先生が選ばれました和紙は、その見本帖の中でも最高級の「鳥の子二号（襖判）」という紙でした。

この口絵二枚（四頁）の紙代は、本文洋紙七三〇頁分の二倍強近くするものでした。先生の紙を見る目の凄さに驚きました。さらにその時、先生は、

「錦正社さん、予算を大きくオーバーするでしょうから、その分は私が負担します。」

と仰られましたので、すぐ「いや大丈夫です。ご心配なく」と痩せ我慢の返事をしてしまいました。正直、これはきついな、と思いました。

それから、著作集の見返は、機械漉きの局紙、化粧扉（本扉）は「西の内」の「忠」を使用しました。この西の内「忠」という手漉和紙は、とても良い、強い、上品な和紙なので、早大印刷所の新井様にお願ひして落しを捨てないで、引取らせてもらい、便箋替りに使っていた処、ある著者の方と、大手版元（出版社）の編集の方から、

「とても良い紙ですね、もし余分がありましたら私にも分けて下さい。」

と申込まれました。また、残りの分は「謹呈」と刷って

謹呈札にしました。これもとても好評でした。先生から手漉和紙の魅力を教えて頂き、体感致しました。

天金仕上本を参冊

先生はいつも、仕上りが近づくくと、

「天金仕上げの本を参冊だけお願いします。」と注文をされました。

昔よく銀行などが、年末にお得意先に三方金で革表紙の手帳を配っていましたが、あれの天の部分にのみ金箔を貼る、乗せる製本の仕上げ方で、天の部分に金箔一枚が隙間無く乗りますので、埃が入りません。本を保護するわけです。

これを発注した処、製本会社の社長さんが、とても感動して「今どき、その様に上製本を大切に下さる先生が居られる、とは嬉しい限り、昔とった杵柄でやらせてもらいます。」と、卵の白味を接着剤にして、刷本を万力でもの凄く締め付けて七百五十頁の天を一枚の面にします。そして、一枚一枚の天に金箔を貼りつけて下さいました。良い仕上りに、先生は、

「是非、その社長さんにお会いしたい。」

と仰られ、神田の弊社の狭い応接室でお会い戴きました。著者と製本屋さんが直接お会いすることはとても珍しい

ことです。

先生はご著書の刊行・出版に関しては、真に丁寧で慎重で、出版社としても心を引き締めて掛かって参りました。先生の御師匠日夏耿之介先生もきつとそうだったのでしょう。

ご自分の著書を造られるのに、印刷段階では、どのような方が活字を拾い、組み、刷って下さるのか？、また製本・仕上げは、どのような工場で、どのような方が職長で纏め上げられるのか、とても関心がおありのようでした。

このような学者先生は、なかなかいらつしやいませぬ。御蔭で私も極力、現場へ足を運んで、手間の掛かる仕事を気持ち良くやって下さる職人さんたちと、直に接してきましたので、制作部数の少ない小出版でも良心的に行してもらい、とても助かりました。

写真挿入について

平均頁数、七百五十頁で二十巻と云っても、さらに各巻平均二百枚近い写真・図版が挿入されています。

本文に組み込まれた写真・図版の他に、よりその理解を深めてもらおう、と写真だけの頁を各巻相当数入れました。これは、その写真が、より良く出るように、と本

文紙よりや、厚目のクリーム紙に印刷してもらい、ノンブル（頁数）を入れませんでした。別頁扱いとしました。それを本文中の最も相応しい処へ、挿入するわけですから、先ほど述べた通り、台割表と云うのが、とても重要になるわけです。確認の上にも、確認して、仕上げるわけです。

この挿入ミスは、現在までの処、一箇処も一回もありません。いかに製本屋さんが、しっかりした仕事をして下さっているのかの証左です。

繰り返しになりますが、その別紙・別丁の写真頁を本文中に貼り込むのは、退職されたベテラン製本職人の手仕事：技となるわけです。

最も本文の関連するところに、その写真を挿入できて、その写真もきれいに製版されていてご満足いただけたいと思います。

米寿記念出版第一巻神樂Ⅰの刊行

その第一回配本の完成、刊行は平成五年五月三十日です。

予約分を納本、送本しましたところ、すぐ岩手の読者の方からお電話があり、

「一冊受け取りました。これは神棚へ供えましたの

で、もう一冊送って下さい。」

また、別のお客様からは、代金の他に林檎一箱を送ってくださいましたので、お礼を申し述べた処、

「本田先生のお蔭で、今神楽を伝承できています。

神楽歌の台本を先生が活字にしてくださいましたので、今 誰でも習得することができます。その感謝の気持ちです、受け取って下さい。」

とのことでした。読者の方の生の声は嬉しく有難いものです。

此のような有難い反響に応えるには、著作集のスムースな刊行以外に無いと考え、先生と一卷一卷着実な刊行に邁進しました。

本田先生と全力で著作集完結に向けて力を注いだ八年間でしたが、途中とても嬉しい有難いニュースもありました。

それは平成六年の秋のことでした。民俗芸能学会の年次大会が沖繩で開かれた時、現地でお会いした小島美子先生から、

「錦正社さん、良い知らせがありますよ、聞いていますか?」「いいえ?」

「それは、本田先生が今年の文化功労者に決まりましたよ。」

との、吉報でした。先生のお仕事の仕上げのお手伝いをしている者にとってこんな幸せなことはありません。

私は、先生と伝統芸能伝承者の方々の触れ合いを横から永年、見続けてきて、

— 本田先生こそ、文化勲章を受けられる方だと、勝手に強く思い込んでいたのです。

八年余の歳月をかけて、漸く平成十二年三月、夢にまでみた、本巻全二十巻が完結刊行できました。正直ホッとしました。先生九十四歳の誕生日でした。

先生にほんとうに喜んで戴きました。

そして先生のお弟子さんから、

「錦正社さん、これは本田先生の美学追求の九十%達成されていますね」

と云われた時は、胸にジーンとききました。

唯一心残りの点は、その編集・造本ではほど満足しなかったと思えるのですが、営業・販売面で良いご報告ができません、真に申訳なく思っています。

私の出版人生を楽しく、充実したものにして下さいました本田先生そして奥様まさ様・お嬢様高橋美代様、真に有難うございました。

(錦正社会長)